

武蔵野日曜集会

不法の法

――ヨハネ伝第5章1～18節――

1984年4月1日（武蔵野）

小池辰雄

「なんじ癒えんことを願うか」 安息日の主 キリストの中に休らう 生きることが人を救うこと
と 不法の法 即身即主

【ヨハネ5:1～18】

1 この後ユダヤ人の祭ありて、イエス、エルサレムに上り給う。² エルサレムにある羊門のほとりにへブル語にてベテスダという池あり、之にそいて五つの廊あり。³ その内に病める者・盲人・跛者・瘦せ衰えたる者ども夥多しく臥しいたり。（水の動くを待てるなり、⁴ それは御使のおりおり降りて水を動かすことあれば、その動きたるのち最先に池にいる者は、如何なる病にても癒ゆる故なり）⁵ ここに三十八年、病になやむ人ありしが、⁶ イエスその臥し居るを見、かつその病の久しきを知り、之に『なんじ癒えんことを願うか』⁷ と言ひ給えば、病める者こたう『主よ、水の動くとき、我を池に入る者なし、我が往くほどに他の人、さきだちて下るなり』⁸ イエス言ひ給う『起きよ、床を取りあげて歩め』⁹ この人ただちに癒え、床を取りあげて歩めり。

その日は安息日に当りたれば、¹⁰ ユダヤ人、医されたる人という『安息日なり、床を取りあぐるは宜しからず』¹¹ 答う『われを医ししその人「床を取りあげて歩め」と云えり』¹² かれら問う『取りあげて歩め』¹³ と言ひし人は誰なるか』¹⁴ されど医されし者は、その誰なるかを知らざりき、そこに群衆いたればイエス退き給ひしに因る。¹⁵ この後イエス宮にて彼に遇いて言いたもう『視よ、なんじ癒えたり。再び罪を犯すな、恐らくは更に大なる悪しきこと汝に起こらん』¹⁶ この人ゆきてユダヤ人に、おのれを医したる者のイエスなるを告ぐ。¹⁷ ここにユダヤ人かかる事を安息日になすとて、イエスを責めたれば、¹⁸ イエス答え給う『わが父は今にいたるまで働き給う、我もまた働くなり』¹⁹ 此に由りてユダヤ人いよいよイエスを殺さんと思う。それは安息日を破るのみならず、神を我が父といひて己を神と等しき者になし給ひし故なり。



●「なんじ癒えんことを願うか」

「この後ユダヤ人の祭ありて、イエス、エルサレムに上り給う。

この「祭」というのは多分、「プーリムの祭」と言われています。これはエステル書と関係がある。エステルとモルデカイが――ハマンという悪いやつがユダヤ人を殺そうとした――それをやっつけてしまうわけです。それでユダヤ人が助かったという、救いの意味です。ユダヤ人が助けられた。エステルの――外典の方にはユーディットというのがやっていまずけれども――この女性の力によったんです。「エステル」というのは「星」という意味です。「スター、シユテルン」というのはそこからくる。「星」といううろわしい名前の女性です。エステル書はヨブ記の前にある。エステル書には「神」という名前がひとつも出てこない。神という字が出てこない不思議なところです。エステル書3章6節に、

「⁶ただモルデカイ一人を殺すは事小さしと思えり。彼らモルデカイの属する民をハマンに頭わしければ、ハマンはアハシユロエロスの国の中にある一切のユダヤ人すなわちモルデカイの属する民をことごとく殺さんと謀れり。」(エステル書3:6)

とある。この陰謀をくつがえしたわけです。「エステル」は花では、天人草、桃堇草とうきょうそうというきれいな名の花です。ペルシア語では「スタラ」という。ギリシア語では「アステール」。そういう「プーリング」の祭です。大体、3月か4月の頃の半ば、14日か15日あたりの二日間にお祭になる。それで、イエスもやって来られたというわけです。特に「ユダヤ人の祭」というのはそういうわけです。

²エルサレムにある羊門のほとりに

「羊門」というのはエルサレムの東北の方にあります。

ヘブル語にてベテスタという池あり、

「ベテスタ」というのは「哀れみの家」という意味です。科学的にいうと、これは間欠泉で、時々噴き出します。

之にそいて五つの廊あり。

柱が五本ある。この池は二重の池になっていて、今でも大体それが分かるんです。かなり深い。下の方に石段をおりていく。

³その内に病める者・盲人・跛者・瘦せ衰えたる者ども夥多おびただしく臥ふしたり。そういう惨めな方々がたくさんいる。

(水の動くを待てるなり、

即ち、噴き出すのを待っているわけです。

⁴それは御使のおりおり降りて水を動かすことあれば、その動きたるのち最先いっさいに池にいる者は、如何なる病にても癒ゆる故なり)

間欠泉が噴き出した時に――これは御使がそうするんだと彼らは信じていたわけです――



そうすると、そこへ最初に入っていった者はどんな病でも治ってしまうと。そういうふう
に信じてやれば、またそういう効果もあつたわけですね。

⁵ここに三十八年、

大変ですわ、これは。「三十八年」とちゃんと数えてある。

病になやむ人ありしが、⁶イエスその臥し居るを見、かつその病の久しきを知
り、

三十八年も寝ていたら、これはどうにもなりません。

之に『なんじ癒えんことを願うか』と言ひ給えば、⁷病める者こたう『主よ、
水の動くとき、我を池に入る者なし、我が往くほどに他の人、さきだちて
下るなり』

いつも遅れてしまうから、どうにもならんと。

⁸イエス言ひ給う『起きよ、床を取りあげて歩め』

もう全然、その池とは関係ない。

⁹この人ただちに癒え、床を取りあげて歩めり。

大変なものですな。38年も病に悩んでいる人に、「起きよ、床を取りあげて歩め」と言えば、
直ちに癒えて歩み出したという。

「なんじ癒えんことを願うか」

という言葉は非常に印象的な言葉です。

「治されたいと思うか」

と。ヒルティがこの言葉を題にして『眠られぬ夜のために』の序論を書いてます。また開
いてご覧になってください。

誰でもが病は持っている。本当に全く健全な人というのはいない。

「私はどこも悪くはない」

と言つても、どこか本当の意味で健全ではない。私なんかはどこも悪くはないようだけ
ども、鼻がきかない。慢性鼻カタルだから、ほとんど臭いが分からない。いわんや心の病
はみんな持っている。これが「罪」というやつだ。だから、心の病も身体の病も、要する
にみんな病人なんだよね。

「病める者、医者を要す」

と言うが、実はみんな病める者なんだ。キリストはあの場合、健全なる者を相対的には考
えていらつしやつたけれども、実はみんな病める者です。お医者さん自身も病める者。た
だ病まない者はキリストだけです、本当の健全な者は。心身ともに全く健やかな者はキリ
ストだけ。だから、キリストは癒す資格があるし、力を持っている。

さきほどの讃美歌にも、

「主よ！ われは祈り入る、みふところこそ愛の力！」



とありましたが、あの讃美歌のようにキリストの中に祈り入ると、俄然、力を得て起き上がる。起き上がったときに、「私はもう力がある」と、力を私したらダメになる。霊的な力を私するとサタンになる。みんな恩寵の現実ですから。絶対恩寵の現実です。

〔註・召団讃歌A22「春は野べに」。「春は野べに夏は海に、秋は山の上に冬は雪に。主よ！われは祈り入る、みふところこそ愛の力！」〕

●安息日の主

その日は安息日^{あんそくにち}に当りたれば、¹⁰ユダヤ人、医^いされたる人にいう『安息日なり、床^{とこ}を取りあぐるは宜^{よろ}しからず』¹¹答う『われを医^いししその人「床^{とこ}を取りあげて歩め」と云えり』¹²かれら問う『取りあげて歩め』と言いし人は誰なるか』

おもしろいね。「安息日となつたら、何をしてもいかん。床を取りあげて歩むこともけしからん。誰だその治した者は」なんて言つてね。

¹³されど醫^いされし者は、その誰なるかを知らざりき、

分からないんだ、キリストということとは。なにか凄い人だなあと思っただけののはなしでね。そこに群衆いたればイエス退き給いしに因る。

大勢いて、イエスはこの38年間の病人を癒したら、すつと姿を消してしまったものだから、なおさら分からない。

¹⁴この後イエス宮にて彼に遇いて言いたもう『視よ、なんじ癒えたり。再び罪を犯すな、

何か罪の結果だったとみえますね、38年というのは。

恐らくは更に大なる悪しきこと汝に起こらん』

もしまだ罪を犯すというと、もつと悪いことになるぞと。

¹⁵この人ゆきてユダヤ人に、おのれを医^いしたる者のイエスなるを告ぐ。

それでやつと分かったわけですね。

¹⁶ここにユダヤ人かかる事を安息日になすとして、イエスを責めたれば、¹⁷イエス答え給う『わが父は今にいたるまで働き給う、我もまた働くなり』

安息日には何をしてもいかんというのに、キリストは

「父は働きたもう」

と。神さまも安息日に休んだと書いてあるね、旧約には。七日目は仕事を止めたのに、キリストは、

「わが父は今にいたるまで働き給う、我もまた働くなり」

と。およそこれは律法に反する大変な言葉です。

¹⁸此に由りてユダヤ人いよいよイエスを殺さんと思う。



これはけしかん野郎だと。

それは安息日を破るのみならず、神を我が父といいて己を神と等しき者になり給いし故なり。

今日は題に、「不法」と書きました。法を破っている。これは破法なんだ。誠命に、「安息日を覚えてこれを潔くすべし」

とある。安息というのは休みなんだ。そのときに働くと言うんだから。マルコ伝2章27節にも、

「²⁷また言いたもう『安息日は人のために設けられて、人は安息日のために設けられず。²⁸然れば人の子は安息日にも主たるなり』」（マルコ2・27～28）とある。さあそれでは、どうするかと。

「では、日曜も集会に來ないで働いてやろう」
なんて、そういう考えを起こすわけですね。

マタイ伝12章1～8節、ルカ伝6章にも書いてある。

「¹その頃イエス安息日に麦畠をとり給いしに、弟子たち飢えて穂を摘み、食い始めたるを、²パリサイ人、見てイエスに言う『視よ、なんじの弟子は安息日に為まじき事をなす』³彼らに言い給う『ダビデがその伴える人々とともに飢えしとき、為しし事を讀まぬか。⁴即ち神の家に入りて、祭司のほかは、己もその伴える人々も食うまじき供のパンを食えり。⁵また安息日に祭司らは宮の内にて安息日を犯せども、罪なきことを律法にて讀まぬか。⁶われ汝らに告ぐ、宮よりも大なる者ここに在り。

ということは、キリストご自身のことです。

⁷「われ憐憫を好みて、犠牲を好まず」とは如何なる意かを、汝ら知りたらんには、罪なき者を罪せざりしならん。⁸それ人の子は安息日の主たるなり」」（マタイ12・1～8）

とある。それから、ルカ伝の方は6章1～5節にマタイ伝と同じことが書いてある。マタイもマルコもルカも、

「それ人の子は安息日の主たるなり」

という言葉がみんな同じように出ている。マタイ12・8とマルコ2・28とルカ6・5。だから、これを共観福音書というんです。ヨハネ伝はこういう言葉は出ていないで、ヨハネ伝では全然別な、今私たちが読んでいる記述が出てきている。

マタイ伝の方は、そのすぐあとで、マタイ伝12章9節から、

「⁹イエス此処を去りて、彼らの会堂に入り給いしに、¹⁰視よ、片手なえたる人あり。人々イエスを訴えんと思ひ、問いていう『安息日に人を医すことは善きか』¹¹彼らに言いたもう『汝等のうち一匹の羊をもてる者あらんに、も



し安息日に穴に陥らば、之を取りあげぬか。¹²人は羊より優ること如何許ぞ。さらば安息日に善をなすは可し¹³ここにかの人に言い給う『なんじの手を伸べよ』かれ伸べたれば、他の手のごとく癒ゆ。¹⁴パリサイ人いでて如何にしてかイエスを亡ぼさんと議る。』(マタイ12・9～14)

ここでもそうなんです。殺そうとしたり亡ぼそうとしたりする。だから、安息日にキリストはまた癒すことをなさった。マタイ伝では別な例でもって、片手なえたる人に癒しをなさったわけです。同じことがマルコ伝でも出ている。マルコ伝3章1～6節から、

『また会堂に入り給いしに、片手なえたる人あり。²人々イエスを訴えんと思いて、安息日にかの人を医すや否やと窺う。³イエス手なえたる人に『中に立て』といい、⁴また人々に言いたもう『安息日に善をなすと悪をなすと、生命を救うと殺すと、いずれかよき』彼ら黙然たり。⁵イエスその心の頑固なるを憂いて、怒り見回して、手なえたる人に『手を伸べよ』と言い給う。かれ手を伸べたれば癒ゆ。⁶パリサイ人いでて、直ちにヘロデ党の人とともに、如何にしてかイエスを亡ぼさんと議る。』(マルコ3:1～6)

安息日にキリストは人を癒された。要するに、キリストの「働く」というのは何かという、人助けなんです。金もうけでも何でもありません。キリストはそんな金銭のことを考えてない。人を助けること。この前の、サマリヤの女との対話でも、弟子たちがせっかく町へ行つて食物を買ってきたのに、キリストは食べない。

「我には別な食物がある。神さまの御意を為すことが自分の食物だ」

と言われた。神さまの御意は、キリストにとつてはみんな人助けです。人を助け、人を救うこと。救助という言葉があるが、正に人を救助することなんだ。魂を静めたり、サタンを追い出したり。

「サタンよ、退け」

と言う。

「レギオン」の話があるね。人が悪鬼につかれた。その中にサタンがいっぱいいた。そしたら、そのサタンをみんな豚の中に入れてしまつて、豚は崖を駆け下りてみんな死んでしまった。豚の持ち主が、けしからんことをすると云つて怒つたという話がある。キリストはそのようにして悪鬼をやつつけた。「レギオン」とは「軍団」のことですから、何千人にいる。そういう現象がときたま起きる。悪鬼は非常に傲慢なんです。それが紙一重なんですよ。

「我を見よ」

とペテロが言いました。使徒行伝3章にある。跛者が何かくれるかと思つたら、

「私を見なさい。私には金銀はない。わがうちにあるものを汝に与える。イエスの名によりて歩め」

と言つたら、生まれつきの跛者が立つて歩きだしたとある。あの「我を見よ」というのは、



「わがうちなるキリストを見よ」

で、決して相対的なペテロではない。だから今度は、

「あの人はえらい大変な人だ」

と言ってペテロを拝もうとしたら、ペテロは、

「なぜ、私を見るか。キリストがなさったんで、私の信仰でも何でもない。私の力でも何でもない」

と言った。あの使徒行伝3章は非常に大事なところですよ。あのペテロの信仰は素晴らしい。

「我を見よ。」

我をなぜ見るか」

という、この二つの矛盾した言葉が実は、

「わがうちなるキリストを見よ。自分は何ものでもないぞ」

ということ。ところが、自分が何ものかになってしまっているような気持ちになると、これは危ない。自分になってしまっているのではない。キリストと本当に一つにされているとき、我は、「我ならざる我」なんです。我ならざる我、それが本当の世界です。その「我ならざる我」のことを私は、「即身即主」という言葉をいつか使ったことがある。この身このまま主と一つになっている。「主」なんですよ、こつちが大事なんです。

●キリストの中に休らう

キリストは安息日にも働いた。「安息日」とは何ですか。安息日とは、休むというけれども、ただボヤッと休んでいるのではない。私たちはキリストの中に休らうんです、我々クリスチャンの安息日というのは。キリストの中に休らうと、力がくる。我々は日曜日にこうやって集会をしながら、力を賜って、生命を賜って、そしてまた六日間走っていくわけだ。六日間を、神さまをそっちのけで走るんじゃないですよ。もちろん、神さまとキリストと一緒になんだけれども。特に安息日は聖書に即して御霊御言の中に入って、キリストの中に休らうことは力を得、生命を得る。少し調子が悪いときは、集会に来たらいい。

「今日は調子が悪くて行かれませんか」
なんて言うが、

「調子が悪いから行きます」
というのが本当だ。キリストは、

「癒されんことを願うか。健やかならんことを願うか」
と聞かれる。

キリストは安息日に我々のために働いてくださっている。キリストは、じつとしていたってちゃんと力を賜るんだ。キリストの働きは「無為の為」という。我々の現代においても、天界においてキリストは何もしないようだけれども、本当は霊をもつていつも働いている。



「無為の為」というのは老子の言葉です。為さざるして為す。何もしないようだが、実はやっている。存在が即ち働きとなっている。在ることが在らしめているような在り方が本当の在り方だ。働いていないようだが、静でありながら動である。静でありながら動いている。静中の動、動中の静という。動でありながら、その中心は全く静かである。そういう境地が非常に大事です。

キリストは安息日を破った。それでは安息日はなしかと。そういう意味ではないですよ。安息日であっても、SOSなんだから、助けられたいんだ。神さまの安らいの中に入るんだ。

「癒されんことを願うか」

と。神の本当の安らいの中に入る。この健やかさの中に入ると、これは本当に安らいの中だよ。平安だから。神の平安の中にいる。私は手紙や葉書の表にいつも「平安」と書く。あなた方にお返事を書いたりする時に必ず書いている。

「キリストにあつて平安なり。どんなことがあつたつて大丈夫だよ」

というのが、この「平安」ということです。

そういうようにキリストは平安を与えるように働いてくださっている。これはもう日月火水木金土、全部。キリストは常に働いてやまない。

「昨日も今日もまた明日も進み行くなり」

と。昨日も今日も明日もまた働き行くなりということですよ。

我々は安息日には深く、しかしまた普段の日でも働きながら、ちゃんとキリストの中に休らなければダメですよ。

「ああ、忙しい、忙しい」

とあせつたらダメになつてしまう。私は、忙しいということを時々言うけれども、あせらない。そして、いつも動中の静となります。それはキリストの中に休らうことなんです。休らうと力が来るから、また動に転ずる。その動の原動力の中にまたスツと入っていく。こういうような円環運動をしよつちゅうやつている。

普段のことでも、勉強に少し飽きたら、今度は別な勉強を、別な本を読むと、またそれで違つてくる。これはヒルティも言っている。まあ人間は相対的な存在だから、そのうちにくたびれたり眠くなつたりするさ。いいよ、その時は。そこでまた休らう。夜寝る時には、もう一切の問題をキリストの中に投げかけて寝る。そうしたら、決して不眠症ではなくなる。

「もうどうなつてもかまやしない。人に何と思われようと一向差し支えない」

というのがキリストの中に休らうこと。キリストの中に眠り入るんだ。

●生きることは人を救うこと

今、共観福音書でも見たように、キリストは片手なえたる人を癒したり、跛者を立たせたり、38年の病人をすぐ立たせたり、もう日曜も何もありません、キリストには。とにかく



く救うことが彼の生命である。彼は、生きることが即ち人を救うことである。キリストにとっては生きることが人を救うことである。

キリストは、助けることが、救いが仕事である。キリストのような救いは、我々にはできない。ただキリストの救いのお手伝いはできる。それはキリストへ持つていけばいい。キリストは救い主、救いの主体なんだから。

「安息日にも主たるなり」

というのは、キリストは救いの主たるものです。救い主のところ人に人を持つていくということ、これが伝道なんだ。そしてまた、救い主の力をいただいて、人を助けること。これも伝道なんです。どっちもそうだ。持つていくか、いただいたものをもって相手を救うていくか。これは御霊でなければできない。私は無教会時代にはこれができなかった。御霊をいただいたら、これができるようになった。「できる」と言っただけで、自分がしているのではない。キリストがなしたもう。何年も手がしびれてしょうがないのが、私が祈って、「はい」と言えば、一瞬にして治ってしまうではないですか。

「はい」

とは、どういう漢字を書くか知っているかい。「拝」と書く。これは手ですよ。こうやって両手で捧げている意味なんです。だから、

「拝する」

ということとは、

「はいと言う」

ということなんです。神さまが何かを賜る。それをこうやって手で拝する。それが「拝する」という、非常に宗教的な具体的な字です。もともと「はい」というのは、自分を捧げている礼拝の気持なんです。だから、「はい」と言えないのは、みんなこれは宗教から脱落しているから、「はい」と言えない。「でも」なんて言っている。デモ行進ばかり。お父さんやお母さんに何か言われても、すぐ「でも」なんだ。

「でも、こうだ……」

と。私のこの兄貴は母親に対しては、本当に「はい」と言っただけで、すべてを実行していたね。私はハッキリ覚えています。

そういう、「はい」と言うのは「拝する」こと。私はこれを知って驚いた。我々がキリストに対して「はい」と言うことは、キリストに本当に礼拝する意味なんです。「礼拝」の「拝」の字はもともと「はい」という字です。

「すべての働きは礼拝なり」

という言葉がある。「働く」はドイツ語で「アルバイテン」というけれども、我々が「働く」というのはいわゆる「アルバイト」とは違うんですよ。「バイト、バイト」なんて言っただけで、ただ金もうけばかりが「バイト」だなんて思っているが。これはパウロがローマ書12章



でも言っているとおりです。働きつつキリストの中に休らう。特に安息日は、キリストの中に深く祈り入り、聖書を読み入り、祈り入って、力を得ることがこの安息なんです。

●不法の法

キリストはいわゆる律法を破ったよ。正直、不法、破法なんだ。ところが、神さまの霊法の中にある。「不法の法」は正に霊法なんだ。律法の法は形式的な法なんだ。形式的な法則、いわゆる旧約的な律法です。しかし、律法をしょっちゅう破るわけではない。律法に従って結構です。ただし、従い方がちがう。他律的に従うのではなくて、自律的に従わなければダメです、自主的に。自主とか自律というのはそういう意味だからね。しかし、その自主、自律が本当に自主、自律であるというものは何かというと、これは神さまの、キリストの僕とならなければ、この自主にはなれない。

このことをあまりハッキリと、ルターがああ『クリスチャンの自由』で言っていないんだよ。キリストの僕となったときに初めて自由である。ルターのあの二つの命題はそこなんだけれども、なぜあそこでルターはハッキリそのことを言わないかと思うくらいです。

「万人に自主なる者である」

ということとは、

「キリストにだけ、神さまにだけ僕であって、他の何ものにも仕えない」

ということ。今度は、

「万人に仕える」

ということとは、

「自主的に誰でも助け、誰にも奉仕する」

というのは、僕であるから、人にその僕としての自覚をもって仕える。キリストは、

「我はエホバの僕」

として万人に仕えた。仕えたというのは、キリストにおいてはみんな人を救うことだ。

力がなければ、本当に仕えるということとはできない。上から力は来るんだ。だから、

「信仰は観念ではダメですよ。御霊が来てなければ、その力はお出きませんよ」

と言っているわけだ。愛の力だから。人に与えれば与えるほど恵まれるんです。己を与えていく。具体的なことでもそうです。ケチケチしているやつは結局ダメです。どうせ、向こう側にいくときには何も持つていけはしないんだから。もう裸で行くんだ。

ただ、向こう側に行くときに御霊を身につけて行かないと。聖書の御言が化体していかなくては。聖書すら持つていくわけにはいかない。私もこの聖書を持つていこうと思っても、持つていけない。向こう側に行くときには、この聖書も置いていかななくては。なにも棺の中に入れて一緒に焼かなくなたっていい。誰かにやるよ。そういうわけで、どしどし活用しなくては。自分自身が活用の主体にならなくては。



キリストというひとは、出来上がったような法を破りながら、実は本当の法則を実践している。本当の法則を、靈法をそこに展開している。

地上は、道がある。自動車は全部、法規に従って動かなかつたら、ぶつかる。それでもしょっちゅう事故をおこしているわけだな。自動車の相対的な法規だつて、これは絶対なんだからね、そういう意味においては。ところが、空中にいくと、道がないから、こんな法規は放棄していいわけだ(笑)。鳥みたいに自由に歩ける。けれども、飛行機だつて、何時にはどっちへの方へ向かって行くというのがちゃんと決まっている。勝手に動くわけにいかない。けれども、要するに、空界は立体的構造だから、非常に自由は自由だ。空界は自由の世界。「不法の法」の法が福音の法則です。「不法の法」の「法」は旧約。旧約をアウフヘーベンして、旧約を破つて、そして新約の法の中にいれる。破っているようだが、実はこれは本当は満たしているキリストは言っておられる。

「律法の一点二画も自分は破っているわけではない」

と。見たところ破っているようだが、実は本当は満たしているんだというわけです。それが「不法の法」ということです。安息日を破りながら、実はキリストは本当の意味において我々を休ませてくださっている。休ませながら力を与えている。いいですね。

●即身即主

キリストというひとは、こんな38年も病の人に、

「起きよ、床を取りて歩め」

なんて言えば、起き上がって歩んだという、大変なひとだね。キリストは、「即身即神」というひとなんです。彼の身体それ自身が神に即している。

空海の教えというのは「即身成仏」なんだ。この身そのまま、あるがままにして仏と成る。親鸞の「南無阿弥陀仏」とはだいぶ違う。しかし、親鸞でも日蓮でも法然でも道元でも、極まるところは本当は一つなんです。即身成仏という。大宇宙の気と一つになる。その大宇宙を自分の身体に入れてしまう。仏の世界はそういう世界だから、大宇宙と一つとなるようなことを言っている。

即ち、あるがままの自分を大乗的に肯定するわけです。「罪」とか何とか言っているのではない。自分なんてものはぬけてしまつて、大宇宙と一つになろうという。この大宇宙が「梵」^{ぼん}の世界で、仏の世界だ。これが「仏心」だから。宇宙心は仏の心だ。そうすると、これと溶け合ってしまうようなことになる。即ち、あるがままにして仏になつてしまう。現世においてその境地に入ることが本当の救いだというようなことを言っているらしい。そうすると、死んでも死なないようなことになる。空海という人は実際かなり人を救っている。小さいときからそうとう神秘的な体験があったようだ。これは密教だからね。真言密教です。「真言」なんていうと、これはヨハネ伝と似ている。密教というのは、正に祈り入って、そ



れと一如になるような神秘的な境地が密教の世界ですから。

ところが、キリストは空海以上に「即身即神」のひとなんだ。

「我を見し者は父を見しなり」

と。神さまの力が百%に顕れた。今度は、この次のところを見ると、

「自分は何もできない」

と言っています。だから、この即神が極まると、無の世界になる。無身なんだよ。心身が無い。あるがままの仏になるためには、やはりそのような境地になる。大宇宙に自分を入れてしまうようなことは、要するにこれと同じことなんです。

「あるがまま」と言ったって、相対的なガタガタをただ肯定しているのではなくて、その中に溶け入る気持で言っているんです、この即身というのは。賜りたるものは本来、大宇宙と同じものである。そのことに悟り入らなくてはいかん。そうすると、仏になるというわけだ。南無阿弥陀仏、南無妙法蓮華経はそれをひとつの道として、南無阿弥陀仏であり、南無妙法蓮華経であるわけだ。結局、それも最後のところはここへみんな来るわけです。

これが本当の活ける真理の証なんです。証人、証者です。これもみんな仏の証者です。キリスト者というのはキリストの証者です。我々の福音では十字架でもって贖われたる根源の我——贖われたる我というものは、

「我もはや生くるにあらず」

という我——これは

「キリストわがうちにありて生くるなり」

と、こうなんだ。やっぱり、即身即神、即身即主なんだ。

「キリストわがうちに生くるなり」

が聖霊の世界だから。大宇宙の霊が入ってくる。要するに同じことなんだ。

まあ、空海が出てこようが、道元が出てこようが、日蓮が出てこようが、法然が出てこようが、一向差し支えない。全部、このキリストの真理でつかめる。本来の「身」というものは十字架されたところの我なんです。無き我です。無我の我という。無我の我というのがそれなんです。これが「即神」の境地です。

それを普通の論理で言くと、すぐに何だかんだと言って、

「そこはこう違う、ああ違う」

とやっているんだ、普通の哲学だと。そうじゃない。もうひとつ越えようと、もう全部共通したものがそこに流れている。まあ、私の詩ではおもしろいことが出てくる。私はその詩を書くのを楽しみにしている。東西古今の真理を掌握しながら展開してやるから。

ヨーロッパ神学が行き詰まるのはそうです。単なる論理が多すぎるから。そこへいくとむしろ中世の神秘家の方が深い世界に入っている。「テオロギア・ゲルマニカ（ドイツ神学）」なんていうのは素晴らしいよ。ルターが非常に影響を受けた。



皆さんは、聖書もその焦点をしつかり持つて読むと楽になる。キリストの言葉ですら躓きを持つているような言葉があるから、そのキリストの言葉の奥の世界をグッとつかまないと。そして、キリストに本当に祈り入ることは真剣勝負です。いい加減な気持ではないですよ、祈り入るといふのは。100%に受けとらなければダメです、信仰の世界は。

「そうなるだろうか？」

ではダメです。根源現実では成っているんです。そこを受けとつていくと、知らない間に力がくる。

「私の祈りはきかれるでしょうか？」

なんて言つて祈つていたら絶対にダメだ。「きかれている」ということ。我なき祈りだから。私欲の祈りはダメだ。私心があつたらダメです。癒されたら、

「それは全部、神さま、あなたのために使います」

と。金をもうけたら、「あなたのために使います」と。何でもそうだよ。知識を得たら、「あなたのために使います」と。全部、それが私心のぬけた祈りなら、どんなに金ももうかるだろうし、知識も展開するだろう。しかし、それは全部神さまに仕えるためなんだ、すべてが。

そうしたら、何だかしらんが、楽でしようがない。楽でしようがないし、力が来てしようがない。

「私はこれだけの福音を受けたら、これは詩の形で表現しないではいられない。これは最後の課題です。絶対に老いばれませんから」

と言っている。まあ、キリストに全託していけば、グングン、力がくるし、知恵がわいてくるし。皆さん一人ひとりみんなそうですよ。

だから、こんなベテスタの池なんていったって、問題じゃない。キリストは池なんか超越してしまっている。キリストこそが「哀れみの家」なんだ。こういう5章を見ても、大変なドラマです。キリストの福音はドラマであつて、教えではない。ドラマの中に自分を入れて行きなさい。そして、体験、体現されていく。若い諸君は、

「ボーイズ・ビー・アンビシャス」（青年よ、大志を抱け）

というの、

「キリストにあつて本当の大志を持つて」

ということ。そうしたらもう、自分も驚くような力が出てくる。では、今日はそのへんにしましょう。

